

第7回塩竈市長期総合計画審議会概要

日 時 平成22年2月16日(火) 19:00~

場 所 塩竈市役所本庁 3階 北側委員会室

出席委員 大滝委員、宮原委員、斎藤委員、馬場委員、狭間委員、土井委員、小野委員、今野委員
北村委員、齋藤(廣)委員、板橋委員、石田委員、阿部(邦)委員、庄子委員、松戸委員
柴田委員、佐々木委員

欠席委員 8名

塩 竈 市 各部長

事 務 局 総務部政策課

司 会 大滝会長

1. 開会

2. 会長挨拶

3. 報告

市民懇談会の提言について

地区別懇談会について

市民アンケート調査の中間報告(転入・転出者)

4. 審議

【市民懇談会提言について】

(委 員) うるおい分科会の中でもう少し防災関係を議論していただきたかったです。防災は緊急体制が重要であり、宮城県沖地震に備えた具体的な施策や話に触られていませんでした。子どもたちが安全で安心して暮らしていけるように話を進めていただければ良いと考えます。

(委 員) 各分科会に共通に出ていることは町内会です。これらは共通した土台に立つものだと考えますので、この点を議論していくべきです。

(委 員) 「うるおいづくり」「ひとづくり」分科会の提言書では、前回の長期総合計画と同じ提言が出ていました。ただ、言葉や表現は時代によって変わってきています。ひとづくり分科会での活動団体の連携、うるおいづくり分科会の「まちなか」というのは現計画の中にも提言書として出されています。現計画の中でしっかり出来上がっていなかったことを市が理解して、次はどうかということを考えていく必要があります。

情報の発信や受信は現計画でも、受信する側の市民がうまく受け止められない。どのように情報を発信し市民に認知度を高めてもらえるかというのが、課題になると考えます。もっとわかりやすく、言葉を砕いてどのような人でもわかる計画を今度は策定していくべきです。

(委 員) 最近の活動について参考までに話をいたします。地域団体として環境に関する活動を続けており、レジ袋の削減や浦戸諸島の環境整備、EM菌を利用した石鹸作り、生ゴミを利用したバイオ菌などに取り組んでいます。

市の環境課と連携して市民の方々と一緒に活動でき、メディアにも取り上げていただきました。最近では、保育所の子どもたちに紙芝居活動を始め、広報で紹介され大きな反響がありました。市民の皆様もこのような活動に参加したいと思っている方が多い、と痛切に感じました。地道な活動を協働で行うことが大事です。

(会 長) 分科会の共通のキーワードを総合計画の骨子、理念にどう反映させるかの議論が必要です。地域力、市民力などの言葉で表わされてきたことですが、これを審議会の中で整理します。市民力や地域力という言葉がもつ意味がどういうものか。

【基本構想骨子案について】

(会 長) 基本方針2と3は深くつながっていて、基本方針4とも繋がっています。地区懇談会の意見からなかなか先が見えない状況が現在の塩竈市ということです。まち全体が産業の面で閉鎖している感があります。これから何をやっていけばいいのか見通せないことについての焦燥感が市民に広がっています。次世代に希望が持てるものがまちの中に存在しているのか、ということについても課題があります。

基本方針2と3の議論を深めて、具体性のあるビジョンを打ち出していきます。今回の審議会は、副会長2名に話をいただいて、さらに議論をしていきます。

(副会長) 塩竈市に車で来た際に、マリングートに来るまで案内板が無く迷いました。新規に来た人にとっては分かりづらい場所ということが第一印象になっています。次期計画の中でもう一度まちを客観的に見直してみる必要があります。

分科会や地区懇談会の皆さんの意見の中に大切にすべきことがあります。それは塩竈市への愛着や塩竈市民であるという誇り、アイデンティティーを育成していくことがキーワードです。人口減少時代において、塩竈市に転入する方はそう多くはありません。その中で転入してきた方に誇りを持ってもらえる取り組みが必要です。

地元学について「うるおいづくり」と「ひとづくり」分科会の中でキーワードとして出てきますが、塩竈市はどのような所かを市民に知っていただく取り組みが必要です。

例えば、私が住んでいる山形県は地域の人たちの帰属意識が強いところですが、塩竈市も以前はそうだったと考えますが、都市化の進展によって薄くなっていますので、良い意味での帰属意識を持つことは大切です。

自分たちでまちをつくるという意識を持ち、自分たちのまちで購買するよう呼びかけていく。観光客にも「塩竈市で食べ、塩竈市で買って下さい」と言う必要があります、それらの行動を喚起する計画を策定していきます。

自分たちでまちをつくるためには連帯感も必要です。例えば、秋田県男鹿市でも人口減少が進んでいますが、元気があります。地元の「なまはげ」検定を実施しており、沖縄県からも受検に来るなど盛り上がっています。

二つ目は、地魚検定というものです。男鹿市の周辺は海に囲まれており、ハタハタをはじめとしてクロダイやトラフグなど様々な魚種が豊富とのことです。その状況を皆に知ってもらうため、検定を始めたとのことです。フグについては、男鹿市沖で取れるのに下関に水揚げされるそうなので、水産業界の方々がトラフグを男鹿市の名物にしようと調理師の研修会をやっています。自分たちの所で取れている魚は自分たちで知って使うことは、観光面からも新しい魅力と考えます。周りに宝があるのに見逃し、気にしていなかった部分は重要です。

このことから塩竈市を素材にし、何かを作っていくという作業を市民と一緒に行動し、観光へ展開していくことができますので、連帯の強化が必要です。

(副会長) 分科会の報告は面白く、素晴らしいもので自分なりにイメージが出来ました。

また、基本構想の骨子案について、将来像と4つの基本方針の中で基本方針3が分かりませんでした。それは方針3の「地域特性を活かしたまちづくり」では、塩竈らしい景観や地域性をうたっているのですが、自然環境や地球環境というグローバルな視点で書かれています。これからの自然環境、生活環境はグローバルな視点で考えていくべきであり、その観点からは、塩竈らしさのローカルな魅力を見つけていくことは違うと考えます。

私の意見として、基本方針3を統廃合して方針は三つに整理します。基本方針3の景観は、基本方針2に移行し、自然環境の大切さ、生活環境にとっての利便性の高いまちを目指していきます。交通体系の整備は、基本方針1に入れると良いと考えます。基本方針は、安心・安全という大切なことですが、それを基本方針3に合わせて、自然環境や生活環境、交通、福祉、子育てという並びで議論することになります。

基本方針2は、都市景観と塩竈学を入れて活用しながら、産業の活性化、特に観光を港湾や商工業、漁業に近づけていきます。観光を色濃く打ち出しながら、これを梃に各産業の活性化を図っていきます。活性化という課題を考えると、人口が増えず、各産業が低迷した状態になっている中で、塩竈市の目指す方向は観光と考えます。観光客を呼び込むだけが観光ではなく、地元の人も自分たちのまちを楽しむことができることをまで含めたものです。

これまでの基本方針2は、活力のある経済として「景観」や「文化」は違うものとして仕分けられました。しかし、10年後を考えた時には文化や景観を経済と一緒に考えていく枠組みが必要になってくることから、大胆に4つの枠組みを組み替えていくことを提案します。

言葉だけではなく、活動や取り組みも変えていくことも重要です。基本方針の教育は必要な課題な

ので残します。

現在の塩竈市の低迷した状況というのはどこから来ているのか。一つの理由としては、過去の栄光が大き過ぎることです。経済的に大きな発展をし、仙台市を凌ぐ勢いだった時代がありました。それが様々な過去の遺産として、受け継ぐものを沢山残してくれたと同時にしがらみがあったのではないのでしょうか。非常に魅力的な素材がありますが、それが魅力化しない。例えば、ヤミ市の問題でも取り上げていますが、なぜ築地やアメ横のようにならないのかという課題を考え、観光というキーワードで組み替えていくことが大事です。

それから、塩竈市は明確な地域イメージが弱いと考えます。歴史のあるまちと皆が言いますが、どこにいけばその歴史を見られるのかというと、塩竈神社でしか歴史は感じられません。また、港町とも言われますが、どこに行けば港らしさが見えるのか。それと同時に塩竈市は神社、マグロ、酒などいろいろなアイテムがあるのでそれをうまく活用していきます。

もう一つ観光という意味では、典型的な港町には港の近くにフード街があり、水を見ながら食事をする場所があります。マリゲートにもそのような店はありますが、少し水に遠い感じがします。空いている場所がたくさんあるので、もったいないと思うので典型的な港町を構想していくことが大事です。

また、観光客は全国から来ているのに、ちょうどいい距離の仙台市からは来ません。要素がたくさんあるが使えていない。土地もありそう。空虚でもったいないと思いました。

(会 長)「活力づくり分科会」の提言書の3ページ「塩竈市の活力づくりのあるべき姿」のイメージは良くできています。審議会の皆さんから知恵を出していただいて、次期計画にうまく盛り込んでいきます。

この図(活力づくり分科会提言書3ページ)を見ていただきますと、従来の塩竈市は、左(産業の連携)と右(資源の連携)が分離していました。しかし、この10年の間に観光を全体として捉えるという形に意識が変わってきたと感じています。

観光をキーワードに水産業や港湾、商業をその中に取り込んでいく意識が市民の皆さんの中でも醸成されてきました。発見・発掘して、磨いて、広げていくというホップ・ステップ・ジャンプの戦略を地域資源の連携の中に明確に埋め込む取り組みが必要です。

市民参加の機会を多く打ち出し、塩竈学でまちの良さを見つけ、広げていきます。3段階の仕組みを構築していくことで、産業の連携と資源の連携は接近してきます。

もう一つは、産業の連携の取り組みを実施しながら、市民の活動を動かしていくことが必要です。双方の意見を持ち寄り出し合うチャンスが少ないので、小さな機会でもいいので家庭の中からあるいは市民の中から、要望やアイデアを提供してもらおうという流れを作っていく取り組みを資源の連携の中で進めていきます。

産業の連携のサイクルをうまく工夫して作ると真ん中にある集客の仕組み、発信の仕組みがしっかりしたものになっていきます。これをベースにしながら、市民にも分かりやすい現実的な絵に書き換えていくこと、市民が参加できる機会を増やしていくことが重要です。

もう一つは、産業分野の人々との連携です。産業連携と資源連携をどのようにリンクするべきか。例えば、産業界若手の人たちが取り組んでおり、いろいろ新しい芽が育ちつつあります。ネット販売など塩竈市を中心に行われてきて、周りが気づかないけど全国で売れているブランド品が出ています。そのことに造詣が深い人たちや経済界の若手の人たちを外から呼んできてリンクの仕方を工夫するということも必要と考えます。

市民懇談会からは、立派な提案をいただいています。この枠組みを基礎として、基本方針の2と3について若年層や子ども達がやっている仕組みを構築し、結びつけていくことが持っているイメージです。提言書をたたき台とし、審議会から知恵を出して議論を深めていくことが私の提案です。

(委 員)基本方針は、現計画とあまり変わらない気がします。あれもやりたいこれもという感があり、本当にやりたいことが出来なくなるので、焦点を絞っていかないと達成できません。

例えば、中新田の「パッハホール」ですが、これにより様々な人が音楽を聴きに来て、買い物や食事をしていくことで、まち起こしの一つになったと考えます。地元への愛着、市民が自分のまちに誇りを持ち歴史を学んでいく、ということをして仕掛けていく必要があります。

(委 員)他県から塩竈市に移り住みました、塩竈はお祭りが多い印象を受けました。うちは御輿の世話役をや

っています。子供たちはお祭りに出ることが誇りで保護者も一生懸命です。

(委員) 芸術文化協会で活動していますが、高齢者が多いです。毎年文化祭をやっています。目標に向かって毎日練習に励んでいます。発表の場を持って充実しています。達成したという誇りをもって、他の人も誘う姿も見受けられます。

(委員) みなと祭りの伝統的な「はっとせ踊り」に長年参加してきました。近年、踊りに参加したいという人が増えており、高齢者からも問い合わせがあります。昔は200人で踊ったそうですが、その伝統がなくなってきて60人程度の参加になっています。御座船の出航する様子がメディアなどで紹介されないのは残念です。歴史と伝統を広げるためにも踊りに参加しやすい雰囲気づくりをしています。

(事務局) みなと祭りについて、各中学校4校と小学校6校が参加しています。「よしこのおどり」に児童・生徒が参加していますので、保護者が応援に来ます。7月の海の日に日程が変更になってから、各学校が練習時間に苦労していますが、市民参加ということで、保護者と生徒が一体となってお祭りを盛り上げています。

(会長) 市民の意欲、やる気というものを日常から引き出してくるのが大事です。それがすべて産業や地域の活性化に結びつくとは限りませんが、市民の意欲とやる気をうまく引き出す仕掛け作りを計画の中に入れていきます。基本方針を支えていく土台について議論を深めていきます。

次回の審議会は3月16日(火)午後7時からです。